

9回 (2024.6)

「家庭の誕生=理想と現実の歴史を追う」(ちくま新書)

本田真隆著

※以下、ネットからの抜粋です。面白いと思わなかった人はコメントしないので、ここでは概ね好印象といったところですね。

●筑摩書房HPの惹句

イエ、家族、夫婦、Home……。様々な呼び方をされるそれらをめぐる錯綜する議論を追うことで、これまで語られなかった近代日本の一面に光をあてる。

・この本の内容

イエ、家族、ホーム、ファミリーなど、多くの名が生まれた理由は、その言葉を用いないと表現できない現象や思いがあったためだ。「家庭」には、リベラル、保守、それぞれの理想が託されてきたが、一方でその理想と現実には様々な乖離があった。明治から昭和、平成、現代まで、それらをめぐる錯綜した議論をときほぐしていくことで、近現代日本の新たな一面に光をあてる。

・著者 ほんだ・まさたか

1986年生まれ。立教大准教授。専門は家族社会学、歴史社会学。著書に『家族情緒の歴史社会学』など。

●朝日新聞書評/2024年02月03日「好書好日」

人と人の結びつき方 続く模索

評者：有田哲文

2年ほど前、「こども庁」になるはずだった役所の名前が「こども家庭庁」に変更された。保守系の議員が「子どもは家庭でお母さんが育てるもの」などと訴えて、巻き返したのだ。いまや「家庭」の2文字は、保守派のお気に入りのようだ。

しかし本書によれば、明治期には進歩的な知識人が好んで使った言葉だった。家長への服従を求め、個人をないがしろにする「家」に対抗し、夫婦の横の関係を軸とする「家庭」の建設を唱えた。親の意思ではなく本人が伴侶を選び、子どもの教育の裁量権を母親が手にする。そんな新しい家族像は、明治の保守派からすれば、日本の伝統を壊す危険思想だった。

家庭はいかに語られてきたか。明治から現代までたどる本書を読むと、二つの論調がせめぎ合ってきたのがわかる。一方は個人が尊重される場を求めて家庭を論じ、他方は国家を支える単位として家庭を扱う。後者の最たるものが、戦時中、皇軍兵士を育てる「母」の役割が強調されたことだ。そのころには家庭は、進歩派の専売特許ではなくなっていた。

前者にしても、女性に家事を委ねる性別役割分業を認めがちな弱点があった。だからといって著者は、家庭という概念から脱却せよなどとは言わない。人は人と何らかの関係を築くこと

なしに生きられない。家庭の歴史には、私的な共同性への願いが込められているのだ。個人を出発点にしながら、多様性をもって家族や共同生活、社会との結びつき方を考えることがいま求められていると著者は述べる。穏健な主張だが、それだけに多くの人に響くだろう。

本書での発見は多々あるが、家庭科が戦後すぐ民主化の一環として生まれたというのは意外だった。家事の分担が民主的かどうかを話し合う学習があり、中学高校では選択科目として男女とも履修できた。先人の理念に敬服する。

●読書メーター 感想・レビュー

・ bittersweet symphony

本来なら個人の権利と社会性をめぐる諸問題の結節点として「家族／家庭」があるわけですが、それをそれとしてきちんと整理して認識するのはなかなか難易度が高いところです。本書は日本におけるその難問に挑んで成功している貴重な著作ではないかと思います。海外の FAMILY/HOME の概念の近代通史的なものがあると、それを歪んで受け入れた近代日本のその捻じれ具合ももっとよく見えるのではないか、というのがあります。

・ ソーシャ

近現代日本における「家／家族／家庭」の理念と実際を、多数の文献を引用しつつ描いた新書。日本における近代家族の形成と普及が論じられるとともに、現代の家族の多様化までの歴史が女性史研究の成果も踏まえつつ丁寧に描かれていて、現在の家庭を巡る問題について俯瞰的な視点が得られる一冊となっています。同新書の『結婚の社会学』より難度は高めですが、両方読むことで両者の問題がつながっていることがわかります。

・ 小林涼太

良書どころか神書だな。確かに家制度、家庭、家族、こういったカテゴリーの歴史の変遷に関する本は見たことがない。見事にまとめられている。300ページ越えの大作であるから、読破には多少の時間はかかるだろうが、その時間を惜しむ必要はないものだった。特に注目したいのは、母性保護論争 (pp114-117) は今でも普遍的な家族のあり方を考える上で重要。また、著者の主張も逆説的でなかなか面白い。詳しくは p332 以降を参照してほしい。最後にこの文章を引用したいが、余白が足りないので割愛する。

・ 森中信彦

この著書は、昨年発足した「こども家庭庁」のネーミングをめぐるゴタゴタの説明から始まる。いったん、「虐待を受けている子供たちにとって「家庭」という言葉は、「毎日を生きること」に必死な戦場を指す言葉」なので、これを入れない「こども庁」にしようとしたが、「伝統的家族観」を重視する自民党保守派に配慮して、結局入れることになったという。またしても、自民党保守派に牛耳られている日本の政治の現状にうんざりとするが、これには、「家庭」の養育責任を強調する「親学」の提唱者の高橋史郎という教育学者が、「崩壊しつつある（続く）家族の絆や親子の絆」を取り戻すことが重要なので、「家庭」の語は必要だという主張の影響もあったようだ。これについて本多は、「あらためて「家庭」のイデオロギー性を浮き彫

りにさせた」と言う。そして、「家庭」という言葉が生まれ、その意味が現在まで変遷してきた経緯を丹念に追っている。結びとして、「個人」をベースに共同性を考える必要がある、「家庭」のかたちをただ守るだけでは、「家庭」で大切にしていたことを見失う可能性がある」と述べ、「家庭」を超えた発想をすることが現実に直面する問題だと説いている。かつての生産等の場でもあった「家」から、家族の生活の場としての「家庭」への変遷についてを考える際の参考にはなる書籍ではあると思う。結びは、要するに、子供の養育を子を産んだ男女の責任としてきた国や社会の伝統が問われているということなのだが、その辺はぼやけている。やはり学者の限界なのだろう。

・てくてく

戦前戦後の日本社会は「家庭」に再生産もケアも教育もなんでも盛り込もうとしていたり、「伝統」の名のもとに古き良き家庭みたいなものをアピールしているけれど、そもそも「家庭」自体が家制度に対抗する概念として明治以降に導入された新たな概念だということなどをまとめている。元ネタの書籍を複数読んでいたため既視感はあるが、まとめ直した一冊ということ意義があるのだと思う。

・カモメ

明治期の「家庭」は明治維新以降新たな家族像を模索するための言葉だった。知識人たちは強力な財産と社会的地位を有した家長である男性に妻や子が服従し夫婦間の愛情が重視されていない上層階級で営まれていた家族生活を念頭として「家庭」を批判していた。そういった批判は西洋のような文明国への仲間入りをさせることも目的であった。当時は男性は公領域、女性は私領域というのはある意味新しい考え方であり、女性は家や夫に従属するのではなく家庭の管理者として自律的に振る舞う地位を獲得するものだった。一方で政府は家制度を再構築し、親や先祖への服従が教育現場などで説かれるようになった。ホワイトカラー労働者により形成される新中間層では夫婦間、家族間の愛情関係が尊重された。高度経済成長期では国家や天皇への献身や家の後継者になることは価値を失っていき、平穩に生きる男性像が台頭し、家事の機械化などにより家庭内での母親の影響力が増した。政治の場では新たな「家庭」像が経済成長を目指す政策と連動しながら形成されていく。「家庭」が国家や保守陣営に取り込まれ、革新陣営が対抗する言葉を喪失していく中で、「家制度の復活」ないしカモフラージュ、資本主義社会の基盤であるといった批判をしていた。70年代には家庭内暴力などで家庭そのものを問題とする視点が台頭し、家庭が不健全な空間とみなされていた。その後現在に繋がるまで国家は家庭への介入を強くしていく。

・jackbdc

面白かった。普遍的な価値を轟かす「家庭」が意外と新参者で捉えどころがなく、近代以降の社会システムに適合する相対的な価値の存在しか保証されるものではないという事実に気付かせてくれる。凝り固まった私の視点を解きほぐしてくれた。まさに読書を通じた発見の楽しさを実感。家庭と似たような概念として子供病気障害などもイメージされる。都市生活における個人<家族<地域<国民国家におけるバズワード、例えば自立、協働やボランティアなどの公

共善に伴う概念は概ね近代以降に生まれ育ったもので脆弱な価値に基づくものなのかもしれない。

・ YASU

家制度がメインだった明治初期に Home の訳語として紹介された「家庭」が、核家族を表す言葉へ、やがてはかつての「家」と同意の言葉へとすり替わっていった過程が実証的に丹念に記述されている。とくに時代ごとの論調（論争）に紙幅が割かれ、母性愛や性別役割、日本型福祉の問題など、教育・福祉・政治全般にわたる論点は今現在にもつながる。現代は、個人が弱った故に家庭が崩れつつあるのだ。ゆえに家庭か個人主義かという二択的思考は愚かだ。その意味でも、右傾化する政治動向に対してタイムリーな良書。

・ MSTR

「家庭」という「概念の誕生」を事実のみで記述してあり、史実を捉えておくのに有用 ◇事実だから、それを今更どうのこうのと言ったところではない ◇「～ねばならない」家庭論は、常に体制のご都合によって来たことがうかがえる ◇現代の「子どもの貧困」も根本原因には目をつむり、母子家庭の責任、女性と社会の在り方に問題をそらしているのでは？ ◇また、美しい日本だ伝統だと謳った政治の文科省関与と、養子縁組は日本の美しい伝統制度だと宣った団体とが、「家庭」をキーワードに繋がってきた事実に「ああ、やっぱり」と納得

・ coco

近現代の日本を対象に「家庭」がいかなる存在であり、その考え方がいかに生じてきたかを解き明かす。明治以来の近代化に伴って社会と家族のあり方が変わってきたなか、当時の知識人から一般人にいたるまで、右も左も様々に論じて「家庭」の言説を生み出していったさまがダイナミックに展開される。われわれが通常思っている「家庭」「家族」がわりと新しい考え方だとはよく指摘されるどころだが、本書を読んでより理解を深めることができた。それを擁護するにしろ批判するにしろ、歴史的な経緯はしっかりと押さえておくべきだろう。

●ブックライブレビュー

福沢諭吉は一夫一婦制を推奨、皇室にも影響を及ぼした。

個人的には、日本の上流階級の間で一般的だった側室が廃れた背景が分かったのが本書から得た最大の収穫。天皇制は側室によって支えられてきた（キリスト教を信仰する欧州の王は、正妻以外の女性の子供に跡を継がせることが不可能）。側室を廃止してしまったことが、現在の跡継ぎ問題の最大の原因。